What is Virtual Reality?
- Some thoughts on the Concept System established in Human Brain and the Reversible Destiny - In memory of ARAKAWA

Kimiaki Tokumaru (System Engineer)

2-6-15 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo, 158-0081 Japan E-mail: tokumaru@pp.iij4u.or.jp

Abstract The difference between human and non-human animals is simply digital or analog communication methods. Dogs also have concepts and establish concept system. Once concept system is constructed in the mind, it works as the framework of world perception and hides some reality. Isn't it a virtual reality? The human mistake is to have developed its civilization disconnected with and antagonistic to the nature. It is time to create a new civilization harmonious with the nature.

Keyword What is VR?, seeing inexistence, blind to existence, concept system, Reversible Destiny, digital linguistics, Boolean Operation NOT, life logic

1. まえがき：デジタル言語学と概念体系
1.1. デジタル言語学概観
深刻化し後戻り不能の様相をみせる地球環境問題に憂慮した筆者は、人類と文明の起源に興味をもち、2007年4月に最古の現生人類遺跡である南アメリカのクライシーズ河口洞窟を訪問した。1][2]

南アメリカの南部海岸線は、今から1億4500万年前にゴンドワナランドが分裂した跡であり、9kmもある厚い砂岩層が1000kmほど続く。洞窟は海拔20mのところに、かつて温暖化していて海水面が高かった時期に海食作用で穿たれてできた。3号洞窟は西に向かって開口していて、インド洋に沈む夕陽を眺めることができる。静かで美しく住み心地よさそうな洞窟の中にいると、ここで人類が言語を獲得する進化をとげたのではないかという思いがしてきました。

帰国後に三鷹天命転換住宅で洞窟生活を試し、ハダカデバネズミの生態と音声通信を調べ、情報理論を基礎から勉強したところ、ヒトとヒト以外の動物の音声通信の違いは、用いられている信号がデジタルであるかどうか、情報源・通信路・伝送路における符号化・復号化が行なわれていることに思い至った。す

なにしろ、離散的な周波数特性をもつ音節の数が言語共通体ごとに一定数に決まっていて、それを組み合わせて作った単語を文法規則にしたがって作ていくことがデジタル通信である。

脳内神経回路に単語単位で内言処理されている。符号化過程は3つあり、どれも無自覚に行なわれている。情報源符号化には、数音節の単語をパターン認識によって記憶に結びつける概念化と、単語をつなぎ合わせる文法規則があるが、どちらも生成的に得られる。自然の音言象を語源に受け入れることは、通信路過程上の符号誤りをおきにくくする通信路符号化に役だっている。

伝送路符号化過程はデジタル変調したものをアナログ復調することによって、エンテロピー的な安定と処理速度の高速化がはかる。つまり、ヒトの発声器官は、舌の位置や口の形状を繊細に制御することによって子音と母音という離散情報を声に与えて変調する一方で、聴音器は動物と同様にアナログな音声振幅の包絡線の情報として単語単位で聴取取っている。ペットの動物がこれを聴いて理解するとき、ヒトと同じように音声制御と記憶のパターン認識が行われて
1.2. イヌの概念体系
後述(3.2)のように、パブロフは犬の感情や欲求の存在を認めないため、一連の条件反射実験では、犬に与えた音響・視覚刺激は興奮刺激(+)・抑制刺激(-)として大脳皮質に伝わると考えていた。この考えでは、同じ刺激を与えて続けてはじめのうち出ていた「効果」(延が急激に(条件反射の「消去」)あるいはだんだんと出なくなる現象(「抑制」)を、大脳皮質の疲労として説明することになる。[4]

犬が記憶をもち、感覚器官から送られてくる刺激を記憶に照らして判断すると想定すると、脳が受け取った刺激を有意(A)・無意(notA)と判断することになる。

この定義は、犬が「学習した」犬が「欲が減退し」たから起きたと解釈できる。[5]

パブロフの興奮・抑制刺激の考えでは、どうしても説明できなかったのが、「相互誘導」現象である。これは犬に餌と結びつく刺激と飼と結びつけない刺激の2種類を教え込んでから行なわれる。「正の相互誘導」は、飼と結びつかない刺激を与えた後で、飼と結びつく刺激を与えると、飼が早く多く出る現象である。「負の相互

誘導」は、飼と結びつく刺激を与えて飼を与えた後で、飼と結びつかない刺激を与えて飼を与えることを繰り返しても、飼と結びつかない刺激の後で飼が出なくなる現象である。

相互誘導実験は、犬の脳内でプール代数のNOTによって2つの刺激がひとつの体系として認識されていると筆者は解釈する。概念体系はヒトに固有のものではなく、生命の物語によって高次神経活動を行なう動物が一般的にももちうものではないか。

2. ないものが見える仮想現実感覚
仮想現実は、「コンピュータグラフィックスや音響効果組み合わせて、人工的に現実感を作り出す技術」として定義されるが、これは仮想現実を作成し、提示する側の定義である。この定義では、画像や音響を提示されたヒトや動物が、それを「現実によく似たもの」として受け取るか、あるいは「現実そのもの」として受け取るかは、あまり問われない。

筆者は、仮想現実とは「現実には存在しないが、刺激を受けた者がそれを現実として受け止めて行動する刺激」と定義する。この定義では、提示された刺激、コンピュータグラフィックスやシンセサイザーによって電子的に作られるとは要求事項ではない。その刺激が、ヒトやヒト以外の動物の脳内に記憶されている現実のパターンと一致して現実に対応するのと同じ行動を招くこと、にもかかわらず現実は存在していないために成果が生まれないことが要件となる。

この定義によれば、電話で息子の名を騙って老人を銀行に出向かせて、犯人の口座に振り込みをさせるオレオレ詐欺も、仮想現実である。息子のためにお金を振り込むても、お金は息子のもとには届かない。

結果が生まれないとよい場合もある。戦闘機の操縦を誤ってもパイロットは死なないし、飛行機も壊れない。難しい操縦を失敗しても被害が生まないとところに、仮想現実の存在価値がある。実際に仮想現実は、ドッグファイトなど戦闘機の戦技訓練のために生まれた技術であるといえている。

ラジオドラマの効果音、たとえば行軍の中に小豆を入れて描かずつ描かずの暴流の音など、それを聞き手が本当に騒騒であると思ったもの仮想現実である。また、人影が鮮やかで紙芝居である。音立ちは人であるのに、人影の動きや話しとの視聴覚連合効果によってそれぞれの登場人物の音として、脳内で処理され、小さい声が遠くでイタニックな演出効果が得られる。

筆者がこの定義に思い至った背景には、美術館の壁に懐かれていた尾形光琳の絵を見て、「おおおおっ、さすが光琳だ。画家本当に天才である」と感動し、いったいどのように描かばどんなにリアルに描けるのだろうかと思って、近づいてしこじみと眺めたところ、ひらがなの「へ」の字をさかさまに一筆で描いているだけであったことに驚いた経験がある。

我々の感覚器官が脳に伝える視聴覚の遠隔刺激は、脳内で長期記憶として保存されている形状や音響のパターンと照合されて、「現実」か、「よくできた偽物」かの弁別が行なわれているのではないか。

光琳の絵やオレオレ詐欺の電話が仮想現実を引き起こすように、脳が現実だと判断するにあたって、ポリゴンの多さや本命の声との類似性は問題ではない。脳内長期記憶のパターンは、我々が思い思いに単純化しているのかかもしれない。いったいどのようなメカニズムによって脳は現実かどうかを判断しているのだろうか。これのみ覚醒だけの問題でもさっそく、紙芝居の例など、複数の人物が視野に入れてときに声が聞こえると、視覚と聴覚の連合作用によって脳は自動的かつ複数人物の会話として受け止めるのは、連合的な錯覚とも考えられる。

3. あるものが見えない仮想現実感覚
ハムレット 何も見えないのだ。
王妃 まったく何も。でも、目に映るのはすべて見えおります。

（シェイクスピア「ハムレット」第3幕）

「ねェ坊ちゃん、見てはいけないという約束を破った

- 94 -
のが、いけなかったのではないですよ。パスケットの手を握いても、男には何も見えなかったということ。
これがとっても怖ろしいことなんですよ。二人のために
女が星の世界から持ってきてくれた。いろんな素敵な
ものが、この男の眼には見えなかったのですねね」
(1・ヴァン・テル・ポスト原作 由良君美訳「プッシュノンの詩」K・I・C思春社 1983年)

誰しも目に映るのはすべて見ているつもりである。
しかしながらそこににあるものが仮にすべて目に映
っていても、脳が認識しないことがある。

存在しないものを現実であると判断することが仮
想現実であるとすれば、あるをないと判断するこ
と、存在しているのに見えない場合も仮想現実
と呼べないだろう。これはコンピュータが现実っぽ
い映像や音響を生み出すという定義では取り扱うこ
のできないばかりではなく、光線の画法も人形浮彫類
の義太夫と織形と比べると別の次元の話である。認識
の枠組み、見る者と聞く者の意識形成によって決定づ
けられることであり、認識者の主観とあるままの現
実を比較対照してはじめて現実と認識の個別、認識の
欠如が明らかになることがある。

あるものをないと判断するのは、現実を存在が目に入
っているにそれを認識できない場合である。情報
処理能力が量的に不足していたり(あまりに膨大な量
の情報だから)、質的に見のがす(目見げでないから)と
いうのは違う。「見つけられる」のではなく、「見
のがす」でもない。目にに入った現実が見えていると
認識できない「見過ごす」場合である。綱模には映っ
ているのに見えないというのは認識の根源にかかわる
よほどの事態である。

3.1. 超現実主義の絵画として現実を捉えた例

はじめに紹介する事例は、原民喜の『夏の花』の一
節である。(6)

原爆投下を受けた翌日の広島の街を歩いていた著
者は、目の前には絵を記録した額だ。ただんれ
の父が助け付けもなく、「超現実主義の画」のように感
じて、片仮名で描きにくくなるしか感じた。この表
現行為は、現実を受け入れることができない作家の心
を表しており、破壊直後の広島の悲惨な状況が認識の
限界を超えていたことを伝える。

ギラギラと炎天の下に横たわっている銀色の虚無の
ひろがりの中に、路があり、川があり、橋があった。
そして、赤むけの膨らしき褐色がどこそこ配
置されてる。これは精巧巧妙な方法で実現された新
地獄に違いなく、ここではすべて人間的なものは抹殺
され、たとえば屍体の表情にしたところで、何か模型
的な機械的なものに置換へられてあるのであった。苦
悶の一瞬足音で硬直したらしい肢体は一種の妖怪い
リズムを含んでいる。電線の乱れ落ちた線や、おびた
dだしい破片で、虚無の中に激震的の図案が感じられる。

だが、さっと転覆して焼けてしまった立ち電車や、
巨大な弾を投げ出して転倒してある馬をみると、どうも、
超現実派の画の世界ではないかと見えるもある。

この辺の印象は、どうも片仮名で描きうき方の応
はしいようだ。それで次に、そんな一節を挿入してお
く。

ギラギラ破片や
灰白色燃えガラガ
ヒロビロトシタ バノラマノヤミ
アカクヤケタマダ ニンゲンノ死体ノキメウナ
リズム
スペテアツガタコ アリエタコノカ
バット剥ぎトツシマツ アトノセカイ
テンプシクマ電車ノワキノ
馬ノ胸ナカノ フクラミカタハ
ブスペクトケムル電線ノニホヒ

3.2. 動物の感覚・思考・感情・欲望を認めない立場

パブロフといえば犬を使った条件反射実験に思い
浮かべる。これは、「パブロフ」という表現が、「条件
反射」という表現を連続的に想起させただけであり、
パブロフがどのような人物で、何を考えてどのような
実験を行ない、どのように実験結果を解釈したかとい
う知識とは別の次元で起きている現象である。

パブロフが何を考えてどんな実験を行なったかは、
彼が1924年に行なった講義録が日本語でも文庫化さ
れている。[4] 上下2冊に3回の講義が記録されている
本書を通じて、パブロフと同僚たちが実験を通じて
考えたことを読み解くことは、筆者にとって驚かなか
か骨の折れる作業であった。

まず、第1講ではパブロフが何を考えて実験を行な
うに至った背景が簡単に書かれ、第2講で犬に条件刺
激を与えるとどういうことか、実験の方法論が論じ
られ、第3講以降は延々と犬に刺激を与え出てくる
変の数を数えるさまざまな実験とその結果が報告され
る。パブロフはそれぞれの実験結果を読み解いて、犬
の大脳皮質で起きている現象を推定し、現象を命名す
る、似たような現象に、まったくなじみのない新しい
概念がとられるのだが、その概念がなぜあのようなこ
のパブロフたちも解明できなかった事例も多く、読者
としていていてのようが大変であった。

第17講からは病的症例の研究であり、はじめは浜
水のトラウマに苦しむ犬や犬によって気質が違うこと
高次神経活動

パフォルマつて、前額皮質細胞と起こす生理現象であり、機械的に起きることが想定されていたからだ。

パフォルマの言葉によれば、一部の同僚たちは「主観的見地にたち」「実験にもかかわらずイヌの答え、感情、欲望などの内面を想像し、リズムをともに分析しようと」という「解釈げて断ついにすると対処し、その後思いこむところに、なんだか一致した結論に達することができなかった。」

パフォルマの立場は、「イヌの感覚、感情、欲望を自分なりに想像してみる必要があるだろうか、断固たる『いま』である」というものであった。[7] そして実験結果とその解釈を読む返すと、この立場で一貫して見ていがしきたがしをかれた。

と、第 23 講でイヌとヒトとで高次神経活動の基盤は同一であるということと矛盾しないだろうか。

つまり、パフォルマはイヌには感覚や欲望や思考がないことを前提に「条件反射」実験を行って、その結果、ヒトとイヌとで大脳半球の拡大は条件反射を同じであるという結論を導いた。もしヒトとイヌとで、感覚、感情、欲望の有無という差があるとすれば、それはどう解釈されるべきだろうか。

パフォルマは現実をフィードバックして認識枠組みを再構築することに至らなかったのだ。前提は間違っていたが、前提となる認識枠組みがあからさまに厳格なパフォルマのものの見方を支配していたため、それを自覚して修正できなかった、矛盾をそのままにして死んでいたようだ。

言語学者の鈴木孝夫の名著「ことばと文化」の第5章「事実に意志を与える価値について」の中で「キリスト教は周縁の知く動物には魂を認めない」という表現がある。パフォルマの思考を制約していたのはこれだったのだろう。キリスト教に詳しい友人に聞いたところ、動物に魂を認めないというのは、聖書に「主なる神は、土(アダム)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者と

が報告されるのが、第19講から21講は大脳の一部、全部を切除した実験の報告で、あまりに痛々しくてまともに読むすきめることができなかった。

最後の第23講でパフォルマは「大脳半球に帰着される高次神経活動のもとという基盤は、高次神経活動である。人間でも同一である。したがってこの活動の基本的現象は、人間でも動物でも、正常でも病的な例でも同じはずだといって反論の余地はない」と結論づける。

こうして読むとおりで、犬でもヒトでも大脳半球の作用は同じであるのかと一瞬納得するが、何度か読む直後に、パフォルマは、犬に記憶や思考・判断能力があると認めないことに気づいた。条件反射と呼ばれるのは、条件刺激が大脳皮質細胞と起こす生理現象であり、機械的に起きることが想定されていたからだ。

4. 概念体系が現実を否定する

4.1. 刺激を分化する能力

パフォルマの行なった実験の中で「分化」と呼ばれる実験は、2つのよく似た刺激のうち一方は食餌異物注入といった口腔内への無条件刺激を伴い、もう一方は無条件刺激を伴わないという条件づけを行うものである。犬は刺激のわずかな違いを別別し、無条件刺激を伴う刺激に対しては出る、伴わない刺激に対しては出ないことを確かめた。

その結果、たとえば、『色覚は犬では概して疲労的であり、多くの犬では全く欠けている』一方で、光の強さの差については、人間の視覚よりはかかるに勝っていることが明らかになった。[4]

「音の高さの分化については、ある程度の吹奏楽器を用いて試験したところ犬の感覚器が完全に正確に捕えた限界の音は5分の1音であり、高い周波数については人間にはほとんど聞きえない高い音で犬は興奮することがわかった。」(略)のように-coreって存在しない音にたいし犬がはっきりとましく正確に反応するのは聞いていて興味のあることだった」と記憶されている。

「メトロノームの異なった頻度にたいする分化の形成は大変容易で、分化の限界は非常に精密で人間のともに及ばないものであった、とくに1分間100回と96回とをずいぶん時間をおいても正確に区別した。」と、犬の感知能力について詳しく報告されている。

4.2. 負の相互誘導実験

パフォルマは、犬が条件刺激を分化できる能力を使った比較実験を行なっている。その中で、「継時複合刺激」は複数の刺激を連続して与える方をわずかに変えるものである。たとえば「ブープ」と「ブープ」といった同じ音のリズムを変えて与えた場合、または「ドリミッ」と「ファミレッド」との刺激に対してそれぞれ分化が行なわれることが確かめられている。
犬の実験、感情や感情を否定するパプロフにとって、「新種複合刺激」による分離の形成は、大脳皮質の同じ部位を刺激しているののようにして分離が可能であるのか説明が困難であった。犬の記憶や判断を研究するならば、時系列の一とつながりの別の刺激として受け止めたと考えられる。だがパプロフの既成概念はそのような説明を取り除かなかった。

パプロフが苦しい説明すらできなかったのは「相互誘導」実験であり、ときに「負の相互誘導」実験であった。これは非条件刺激を伴わない条件刺激として分離した刺激を、無条件刺激を伴う条件刺激に変更（「分化抑制の破壊」）する実験である。

「無条件刺激を伴う分化刺激をつぎつぎと続けて与える場合、抑制過程の破壊は一回目または一回目の数回回にはじまったが、この組合せ刺激を正の条件刺激と規則的に入れかえた場合、破壊は非常に時間的に遅れ、多くの回数、ときには数十回もくりかえしたのちじまった」とパプロフは報告している。

この実験は、いったん2つの条件刺激を用いて「餌」、「非餌」という分離を行なった上で、「非餌」という刺激の後で餌を与えて、「非餌」という刺激に対して餌が出るように変えるという実験である。

「非餌」という刺激を単独で与えながら、その後で餌を出すと、すぐに「非餌」という刺激に対して餌が出るようになった。（これは「餌」という刺激の後で餌を与えないときも同様にすぐに餌が出なくなり、パプロフはそれを「条件反射の消去」と呼んでいる。）

しかしながら、餌の刺激の後で餌を与え、その後に「非餌」という刺激を与えると、このサイクルを何十回繰り返しても餌が出るようにならないというのである。パプロフはこの現象をどうしても解明できなかった。

4.3. NOTにもとづいた概念体系の構築

パプロフは条件反射の分化実験において、犬の視覚の色彩や明度、聴覚の周波数や頻度の分解能力に着目していた。はじめのうちは筆者もそのように受け取って読んでいた。

しかし、犬が異なる条件刺激に対して効果の無 hebben反応したのは、犬が一方の刺激を無条件反射を意味する記号として、もう一方をそうではない記号として受け止めることである。すなわち、受け取った刺激は、Aと非Aとして分離されたことになる。これは犬がプール演算のNOTによって、世界を記号化して切り分けるということではないか。そこで、そのように世界を分化した体系が出来上がったために、負の相互誘導においてAと非Aの刺激を交互に受けたとき、非Aの刺激の後で何度無条件刺激を受けても反応が非Aであり続けたのではないだろうか。

代数の研究結果を確かめることはできなかったので、あくまで推論であるが、NOTという関数を手に入れると、世界は二元分化され樹状図に体系化される。

\[ A = B + \text{Not}B \]

\[ = B + (C + \text{Not}C) \]

\[ = B + C + (D + \text{Not}D) \]

こうして概念体系は、動物の知能の働きとして、生命の論理にしたがって構築されるのではないかだろうか。

5. 文明を自然に近づける天命反転

もしかすると我々の文明全体は、石器時代の狩猟採集民から受けついた能や感情が根本的に相容れないものであり、人類としての正しい進歩を逸脱していけるのかもしれない。もしものなら、なぜそのような発展が起こりえたのか。

(H. Martín "The Sheltering Desert - Robinson Crusoes in the Namib")

5.1. ブッシュマンの魂

宗教教育の結果、パプロフが犬の感情や感情を否定したことを、我々は笑えるだろうか。我々自身がもっている概念体系は本当に正しいのか、もし正しいとしたら、なぜ地球環境問題は起こったのか。正しくないとしたら、どこがどう間違っているのか。

パノンが自分にインストールされているOSを疑うのは大変なよう、無意識に自己に植え付けられた概念体系は、意識化するだけでも難しい。それが未発達しているかどうかはどうすれば知るのだろう。

"The Sheltering Desert"は第二次世界大戦中に、ナチス政権に従属されることに選ぶために2人の若きドイツ人地質学者がナミビアで二年半にわたってロビンソン・クルーソーのように暮らした記録である。

2人は、ナチスが政権をとってファシズムへ戦争へと突き進むドイツを逃れて、ドイツ領南西アフリカ(現在のナミビア)で仕事をしていた。いよいよ第二次世界大戦が始まるとき、ドイツ軍がマジノ線を破って破竹の勢いで進軍し、南西アフリカにも戦争のブロッサングラやと熱狂がおこしてしまった。彼らは砂漠に隠れることを決意する。食料や弾薬はその他のものを調達し、1匹の犬を連れて、2人を台の小型トラックに乗って砂漠に隠れて家を探す。そして2年半にわたる砂漠でのサバイバル生活が始まる。

洞窟に居を構えた彼らは、どうやって何と食料を確保するかで頭がいっぱいになる。ブストルやライフという近代兵器を持っているだけでは野生動物を仕留めることはできない。彼らは徐々に狩猟民の心や勤務を取り戻す、そして星空のもとで毎晩語っていられるので、我々の文明が、進歩というよりはむしろ衰えていた。
という思いが浮かんでくるのだった。
「おそらく感覚は生命体に対して、状況が良かろう
でないかを伝える判断だ。すると判断を形成する能力
は、生命にとっての基本的な属性ということになる」
「本当に基本的なだろうか」
「そうだ。生命現象のない無生物と比較して、生物
の特徴は活動するところにある。単細胞生物であって
も、飛んでいくことや外部に対して問ざでさえ、好
ましくない環境を避けることができる。しかしそな
るためには、感覚、あるいは判断能力が必要となる。
そうでないと、好ましくないか知りえない」
「そのとおりだ。しかしそれぞれの感覚が判断を
含んでいるとしたら、人间の判断能力があるの
も、実はあらゆる生命体がもっている原初的本能が発
展しただけにすぎないのではないか。

すると、単細胞生物が人間の到達した高い知的能力
に至る可能性を持っているといえるかね」

「結局、何千年世にもわたって我々の先祖は今日我々が
こうして（砂漠で狩猟生活）暮らしているように生きて
た。そして過去の2-300世紀では、我々の根幹の
本能にたいした変化はまばらなかった。要するに
我々の魂は石器時代人のままなのだ」

「君は、現代人は自分たち自身の文明と調和していな
いないというんだ。私もそう思う。」
— The Sheltering Desert

5.2. 自然と調和した心を作る「天命反転」

自分の中のブッシュマンの魂を見つけようとするために砂
漠で自活するのは大変である。もう少し山間地帯で手軽に
できないかなと考えたとき、荒川修作が天命反転
(Reversible Destiny)とはいう文明を築くことである
といっていたことを思い出した。直線や平面で自然を
切りとるのではなく、自然の形に合わせて文明空間を
構築して、そこで人間が居住し活動する文明である。

三鷹や養老の天命反転空間には、しっかりとした使
用法が用いられている。既成概念を捨てて、新しく記
憶と知識を生み出す気持ちをもって、使用法にしたが
った生活をすれば人間は石器時代の自然と融合した魂
を取り戻せる。最澄が求めた修験道の世界は天台宗で
千日回転として今日に伝わる。道元が打ち立てた只
管打坐の坐禅行は今も多くの人々を悟りと導く。ア
ラカワの天命反転は千日回転や只管打坐に匹敵し、21
世紀の人類を自然へと回帰させる手法である。

何度か家をでたり入ったりし、その都度違った入口
を通ること。
中に入ってバランスを失うような気がしたら、自分
の名前を叫んでみること。他者の名前でもよい。
自分の家とはっきりした類似を見つけるように
すること。もしできなければ、この家が自分の双子だ
と思って歩くこと。

今この家に住んでいるつもりで、または隣に住んで
いるようなつもりで動き回ること。

思案することが起こったら、そこで立ち止まり、20秒
ほどかけて(もっと考え尽くすために)よりよい姿勢を
とること。

どんな角度から眺める時も、複数の地平線を使って
見るようすること。

—養老天命反転地 極限で似るものの家 使用法

我々の意識は、物質文明の中でより多くの消費や所
有を追い求めるように初期化されるが、それが間違っ
ているのだ。直線や平面で切りとられた空間が、我々
の DNA の中にある石器時代の心を封じ込め、だと
すれば、自然の造形に合わせて各を、居住空間をつくり
あげれば、人間は正しい意識を取り戻せないか。

荒川修作は、50余年アメリカで暮らし続け、日本か
ら失われつつある里山の風景や地形を、養老の公園と
三鷹の住宅に天命反転空間として復元し、自然の多様
性と調和した心を取り戻す仕組みを作り上げたのだ。

自然の多様性を反映するつまった空間に住み、そ
れを楽しむ。物質の所有を顧わず、不必要に自然を破
さない、そうすれば人間が他の動物より優いといった
考えは生まれない。忘れていた動物時代の記憶を取り
戻すことができ、後戻り不能な地球環境問題によって人類
のみならずすべての生物にとって生きづらくなった
21世紀を生きていくうえで大切であろう。

謝辞

本研究のために三鷹天命反転住宅への短期居住を
許していたいただいた倉富和子さん、株式会社 ABRF に感謝
します。

文献
[1] 得丸宏明: クラシーズ河口洞窟 人類が暮ら
った場所を探して, SOTOKOTO 2007.9
り始めいた洞窟を探して, 潜測 2007.12
[3] 得丸宏明: ヒトの音声は phonitでデジタル変調さ
れている(復調はアナログ方式である) -デジタル
音語学(その1) 情虚学会研究会 SLP-81-11
件反射学, 川村浩治, 岩波文庫 1975
[5] 得丸宏明:知識の表現型と遺伝子型(デジタル音語
学) 「条件反射」と「分節音語」を考察 信学技
報 TL2010-10
[7] バブルフ I.P. 高次神経活動の客観的研究, 岡田靖
雄・横山恒子訳, 1979 岩崎数学出版社 p19
[8] F.クリック 熱き探求の日々1989 TBS プリタニカ